魔界

美鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔界

【Ｎコード】
Ｎ３３８１Ｕ

【作者名】
美鈴

【あらすじ】
留学するためイギリスに降り立った間宮可奈は、道に迷い大きなお城の建物を見つける。
『魔界書庫』と呼ばれるそこには、実はとんでもない秘密が隠されていた…。

新天地

魔界とは、魔王と呼ばれる人ならざる者が治める世界。

悪魔や魔獣などという人を襲い、恐怖の対象である存在が存在する。

大半の物語ではそう言われている。

そう、魔界というのは想像で出来た世界であり、本当に前に説明したような説明であるわけではないのだ。

人それぞれの想像があり、理想がある。

そして今回の魔界は、そんな常識を覆すような世界である。

さぁ、皆様で見てみましょう。

＊＊＊＊＊

「…うん！新天地！！」

人がごった返した空港から飛び出し、朝の新鮮な空気を吸って吐いてを繰り返しながら、長旅だった飛行機での疲れた体を癒す。

彼女の名前は間宮可奈。

今日から育ち慣れ親しんだ家、そして日本を離れ、勉強するためにイギリスに留学に来ていた。

ミステリーやファンタジーが生まれた国であるイギリス。

読書が大好きである可奈にとっては、物語の世界に迷い込んだような錯覚を覚えるのだろう。

「えっと、荷物は留学先の学校にもう届いてる筈だから、…少し見て回ってもいいよね」

時間内にあっちにつけばいいんだし、と考えて幸せオーラを全身に放出しながら、これから生活していく地を力強く踏み締めるのだった。

不思議な書庫

日本で買ったガイドブックを片手に憧れていた初の海外に浮かれていた可奈。

彼女はすぐに大きな間違いを犯してしまうことになる。

メインストリートから一本道を外れてしまったことから、当然土地勘のない彼女は迷子になってしまったのだ。

「や、やだ…どうしよう…」

多少は英語が話せるものの、知らない土地で頼れるものもいない可奈は途方に暮れていた。

（ここで迷っていたら、学校の寮につく時間が遅れちゃうな）

懸命に地図とにらみっこしていると、リーンゴーンと近くの鐘がなる。

教会でも近くにあるのだろうかと地図から顔を上げて、可奈はその建物を見上げる。

それは教会などではなく、まるでお城のような建造物でありその存在を見事に主張していた。

地図には残念ながらその存在は書かれておらず、門が開門しているのに衛兵がいないことから、お城ではないことは確かだ。

恐る恐る近づいてみると、門に文字が書かれていた。

『魔界書庫』

そう書かれていた。

魔界というのに違和感を感じたが、書庫ということは本が置かれているのだと判断した可奈は、自身の好奇心に火がついて門の中へと足を踏み入れた。

自他共に認める『本の虫』である可奈に、今は怖いものなどない。

「失礼しまーす…」

大きな正面の扉に手をかけると、それは想像していたよりもあっさりと開き、可奈は中を覗き込む。

中もやはりお城のように広く、大理石なのだろうか床は存在感があり、掃除が行き届いているのか周りの壁や彫刻品などに埃がないように見える。

あまりにも自分の住む世界が違いすぎる空間に少し顔をひきつるが、中からする本独特の匂いに中へと足を進める。

ゆっくりと扉を閉めてから、右の部屋の扉に“第一書庫入口”と書かれていたので入ってみる。

「うわぁ…！」

そこは壁という壁に本がぎっしりと敷き詰められ、正に圧巻。

近くにあった棚から丁寧に本を抜き取りペラペラ捲ると、その本は５００年程前の本だった。

「凄い。こんな貴重な本がこんなに綺麗なまま保存されてあるなんて…。多分王立図書館にもないかもしれない」

「いやはや、お褒めに預かり光栄じゃな。お嬢さん」

「…っ！？」

背後からの声に危うく持っていた本を床に落としそうになったが、腕に抱え込み無事だった。

軽く深呼吸してから振り向くと、そこには人当たりが良さそうな老人がいた。

「ああ、すまんね。いきなりだから驚かせてしまったか」

「いいえ！あ、あの…この書庫の持ち主の方ですか？勝手に上がり込んですみません！」

取り敢えず謝罪をして入口で声を掛けたことを伝えると、老人は気にしなくていいと答えた。

「ほっほっほ、謝ることはない。一応ここは一般に開放しているんだが、どうも人が寄り付かんでな。いやはや…いつぶりだろうなぁ、お客人が来るのは」

「あの、門に書庫って書かれてありましたけど…これはこのお城全

部が？」

「おお、そうじゃよ。第一から第…幾つじゃったか。客間や生活スペース以外は全部ワシの先祖が集めた本が置いてある」

「へぇ…こんなに、凄いですね」

老人の先祖は余程本が好きだったのだろう。

ジャンルなんて決まってなく、世に出た本を全て集めていたからこそ、こんなにも膨大な数を集められたのだ。

何年もかけて。

「先祖だけではないぞ。最新の書庫にはワシが集めておるあらゆる本が置いてある。代々もう何百年という長きに渡って出る本全てを集めておる」

「ほぁ…」

老人の小さな目にやる気の炎が灯っていることから、すごい執念が感じられる。

もう、返す言葉もない。

「それにしても、こんなに沢山あると一生で全部見るなんて無理ですよね。…悔しいです」

「ほう、君は本が大好きなんだね」

「はい！時にジャンルを決めている訳じゃなくて、読める本なら何でも。だからここの本も読んで見たいんですけど…」

本当に名残惜しい、ここまで揃えられている本があるなかで、それを人生生きている時間の中で見ることが出来ないのが。

近くにある本にまた手を伸ばしペラペラと捲っていく。

「確かに全部見ることは不可能だろうが、ある程度は見ることが出来るじゃろう。いつでも来なさい。ここの本達は逃げはしないよ」

「あ、ありがとうございます」

お礼を言うと、携帯がいきなり鳴り出した。

学校の寮につかなければいけない時間の1時間前にセットしていたアラームが鳴ったのだ。

「わわ！そんなっ、もうこんな時間なの？ああ、どうしよう…！」

「どうしたのかな？」

可奈は酷く言いにくいことだったが背に腹は変えられないので、老人に迷子になっていたことを伝えると、彼は快く寮までの道のりを教えてくれたっだった。

そうしてなんとか寮に着いた可奈は、それから荷物の片付けに先生方に挨拶と、海外一日目が終了した。

そしてあの『魔界書庫』に通い始めるのは、学校に慣れてすぐのことだった。

来訪者

ここ一ヶ月で慣れ始めた道を歩きながら、可奈は目的の場所へと向かった。

その場所は『魔界書庫』と言って、可奈がイギリスに初めて来た時に迷い込んだ建物だ。

お城の様に外観をして目立つように見えて、実は周りの建物に同化したようにその存在はうまく隠れいている。

だからなのか、ガイドブックに載っておらず、地元の同級生に聞いてもその存在を知る人は誰一人居なかった。

メインストリートから一本外れただけで、そんなにも分からないものだろうか？

「本当に不思議…。まるで魔法で隠されてるみたい」

なんて独り言をするが、あり得ない事だと思考から排除し、可奈は目の前にある豪華な扉を開ける。

「失礼しまーす」

「ああ、可奈さん。こんにちは。今日もよく来てくれたね」

「こんにちは！シェイドさん。あ、これお土産です。どうぞ食べて下さい」

扉を開けるとそこには書庫を管理している老人・シェイドが受付と書かれた机に座っていた。

老人特有の落ち着いた雰囲気に和みながら、可奈は用意していた物を鞄から取り出しシェイドに差し出す。

「ほう、わざわざありがとう。しかし…これはなんだね？」

「堅焼きっていう煎餅です。日本の伝統的な食べ物で、お裾分けです」

実は留学するにあたり、両親から日本の味が恋しくなったら食べるようにとお米やらと共に送られてきたもの。

だが量が沢山ありすぎて同級生にも配ったりと処理しているのだ。

「日本の物か！ワシも長いこと生きているが日本の物は食べたことがないから頂くとしよう」

「あ、すごーく硬いから気を付けて下さいね」

気に入ってくれたようで、さっそくお茶を用意して一緒に食べようと誘われる。

可奈はそれに快く返事をして二人は客間に移動して、紅茶と堅焼きという異色の組み合わせで食べるのだった。

「ふむ、これは、なかなか、硬い、のう…」

「歯気を付けて下さいよ？折れたりしたら一大事ですから」

「ワシは、そこまで、老いては、おらんぞ！」
部屋にはバリボリといい音が響き、煎餅独特の香りが部屋に充満していく。
「ぬぅ…っ！？」
「え、きゃあ！歯茎から血が出てますよ！シェイドさん、もう食べるのはストップですー！！」
シェイドの口から血がだらだらと出てくるのを見て、可奈は珍しいからと堅焼きを持ってきたことを後悔した。
年寄りには、硬いものは寄越してはいけないと心に誓うのだった。

＊

混乱が収まった所で紅茶を飲みながら、可奈達は世話話をしていた。
「…では可奈さんは翻訳家になりたくて、日本から遥々遠いこの地に単身留学しに来たのかね」
「はい。この国はミステリーやファンタジーの宝庫で、翻訳されていない素敵な作品が沢山あります。私はそんな沢山の作品を日本の人に一人でも多く見て貰いたくて」
「実に素晴らしい夢だね。頑張りなさい」

「はい！」

自分の夢を応援すると言うシェイドに可奈は満面の笑顔で応えた。

さてそろそろ書庫に向かい読書しようと椅子から立ち上がると、チリリンと風鈴のような綺麗な音が辺りに響いた。

「おや、もうそんな時間か」

「…？時計のアラームですか？」

「いいや、違うよ。来訪者を報せる音じゃ。さて出迎えてやらねば」

そう言うとシェイドは重い腰を持ち上げ、部屋へと出ていってしまう。

可奈もその後に続くように部屋から出ると、なんとシェイドは正面玄関に続く通路と反対側に歩いているのを目撃した。

「シェイドさん？玄関はこっちの筈ですよ？」

「わかっておる。しかし客はこちらにある扉から来るのでな。もし良かったら可奈さんもついて来るかい？」

「え、あ、じゃあ…お言葉に甘えて」

今回は読書よりもこの書庫に訪ねてくるという人を見たいという想いが勝ったので、可奈はシェイドの後をついていくことにした。

この書庫に何度も訪ねているが、他の利用者は今まで見たことがない。

一体どんな人なのか、可奈は知らずに胸が高鳴っていた。

「ここじゃよ」

暫く長い長い通路を歩き、着いた場所は正面玄関の扉と同じくらい豪華な作りの扉がそこにあった。

しかしその扉にはある筈の物がないことに気がついた。

「あれ…、これ扉なのに取っ手がない」

それは、取っ手が何処にも見当たらないのだ。

本来取っ手がある筈の場所には、拳サイズの大きなルビーの付いている。

そのルビーは仄かに淡い光を発しながら、チリリンと先ほど部屋からした音を発していた。

「シェイドさん。これって…」

「話は後に。客人を待たせる訳にはいかんからのう」

シェイドは慣れた手つきで拳サイズのルビーに手を翳し、聞いたことがない言葉を口にした。

それと同時にルビーが一瞬今までにないくらいの光を放ってから、

カチリとまるで錠が外れるような音がした後扉がゆっくりと内側に向かい開いていく。

そして向こう側から現れたのは、人懐こい笑顔をした一人の男性だった。

今時の若者の服を着た男性は、大きなリュックを背負いながら扉を潜ると目の前にいたシェイドにお辞儀をした。

「これはシェイド様。お手数をお掛けして申し訳ございません」

「気にすることはない。鍵を掛けたのはワシだからのう。寧ろ謝るのはこちらの方じゃ」

「いえいえ私の方が予定より早めに来てしまったようですから。…おや、そちらの方は…」

シェイドと話していた男性は、可奈の姿を見つけるとじっと何かを探るように可奈を見つめる。

初対面の相手にそんな視線で見られてどうしたらいいのか分からなくなった可奈は、取り敢えずお辞儀をしてみた。

「ほう…なかなかいい魔力をお持ちだ。流石この『魔界書庫』に入れるだけのことはありますね。地上にもまだこんな力を秘めた方がいるとは…」

「あの…？」

男性は魔力だとか、地上だとか、まるでお伽噺の登場人物が言うよ

うな台詞を言ってくる。

困惑した表情で話し掛けると、男性は自分が不躾な視線を向けていたことに気付いて謝ってきた。

「これは失礼しました。私の名前はキースと申します。商売人をしておりますので、なにかご用がおありの際は何なりとお申し付け下さい」

そう言いながら背負っていたリュックを少し揺らす。

成る程、あのリュックの中には売り物が入っているのかと可奈は納得した。

「はじめまして。私は間宮…いえ、可奈・間宮です」

「では、カナ。時間が押しているのでこれで失礼します。シェイド様も失礼致しました」

「気を付けるのだぞ」

そしてキースは可奈達をすり抜け、長い通路を歩いていった。

可奈は小さくなるキースの後ろ姿を見てから、先ほどキースが出てきた扉へと目を向けた。

開いた扉の向こうは真っ暗で、よく見ると下に続く階段があるように見える。

こんな立派なお城の建物なのだから、地下があっても可笑しくはな

いのだが、それとは違う感じがした。
もし地下だとしたら、シェイドはキースのことを来訪者などと言わないだろう。
来訪者とは外から来た客人の事であり、地下という内にいる筈の人には当てはまらない。
では、この階段は『外』に続いているのだろうか。
（まさか、地下に広がる異世界…なんて物語じゃないんだし…）
しかし、先ほどのシェイドが見せた光景はなんと説明すればいいのか。
「可奈さん。ちょっといいかね」
「は、はい！」
「疑問に思っているようだからね、きっちり説明しよう。今日は読書をさせてあげられる時間が無くなるかもしれんが、どうかね？」
「是非、お願いします」
シェイドの言葉に迷うことなく頷いてみせる。
そして二人は再び客間に戻ると、新しく紅茶をいれて一服してからシェイドはゆっくりと話し始めた。

昔話

遥か昔、この地にはそれは立派な王国がありました。

人々は活気に溢れ、緑が生い茂り、それは豊かな生活をしていたのです。

その王国には他国とは違い大小の魔力が存在し、王族はそれは見事な魔力を代々持ち得ていた。

そんなある日の事、本の収集が趣味であった王は城の書庫に入りきらなくなってきた本に頭を抱えていました。

本は増えはしても減ることはないからである。

そこで王は考えた。

自らの魔力を使い異空間を作り、そこに本を置いておけばいいのだと。

早速王は本の整理を始め、異空間に移動する本を選定し始めた。

その選ばれた本は主に魔術に関するものであるのは、ただの気まぐれであったという。

こうして異空間を作り出し、そこに本を保管する為の城を作った王はそれからすぐに民に言った。

『私が作った異空間の中に書庫を作った。見たいものは自由に見る

といい』

元々気さくな王族であったため、独占などはせずに見たいものには自由に見れるように城の自慢の書庫も開放していたという。

それを知った魔術師達は、こぞって貴重な魔術本があるという異空間に入り浸るようになった。

そしてそんな彼らが何日も異空間に入り浸っていることを知った商人たちは、彼らを対象に異空間で商売を始めた。

飲食店を出したり、宿屋を作ったり。

いつしかその異空間は書庫という役割を忘れ、人が住む異世界へと長い年月を掛けて変わっていった。

その頃には本来の魔力を持って維持してきた王国は衰退し、代わりに文明機器を作り出し仕掛けてきた隣国に乗っ取られようとしていた。

敗北を知った民は逃げるように異空間へと向かい、王族はそんな民を導く為に自らも異空間へと足を向けたのだった。

そして第二の王国が作り出され、誰が最初に言い出したのかは知らないが、魔力のある者達だけの世界…『魔界』と異空間に名前がつけられた。

これこそが、『魔界』の誕生である。

＊

可奈はシェイドから話されたことにワンテンポ遅れながら相槌をうった。

まさに物語の中の話のようだった。

「理解出来たかな？」

「あ…はい、多分。…えっと、つまりあの地下には異空間が広がってて…魔界って呼ばれてて…このお城は昔の王国のお城…だというのは、分かりました」

「おお、最初でそこまで理解出来るとは、やはり可奈さんは想像力豊かなじゃな」

「あはは、どうも。…そこで一つ思ったんですけど、このお城の本を先祖から集めてたって言ってたってことは、もしかしてシェイドさんって、その王国の王族？」

そうだとしたらとても大変なことだ。

いくら昔の王国の王族だとしても、一般人である可奈が軽々しく話していい人ではない。

シェイドが気にしないとしても、可奈は気にするだろう。

「そうだ。そしてワシがここの管理をする前は魔界で王をしていたぞ」

「ええ！？」

まさかの王発言に驚いた可奈だったが、シェイドは現役は引退したから今はしがない書庫の司書だと言う。

「はぁ…なんだか、現実離れしてますね…」

驚き過ぎて疲れた可奈は、シェイドが入れてくれた紅茶を飲んで落ち着くことにした。

「この城の存在自体も現実離れしとると思うがのう。不思議に思わなかったかい？何故街にこんな建物があるのに、周りは気付かないのかと」

「…確かに、そうですね」

可奈は自分が思ったことを思い出した。

まるで、魔法で隠されてるみたいだと…。

そうでなければこのお城は目立ち過ぎるはずだから。

「まさか…！！」

「そのまさかじゃよ。王国が滅んでから、ずっとこの城には魔術が掛かっており、資格のある魔力の持ち主以外には見えぬように施されておる」

そしてその魔術に気づかずにこのお城『魔界書庫』を見つけた可奈は、当然シェイドが言う資格のある魔力の持ち主だというのだ。

そして資格というのは、『魔界書庫』に入る事ともう一つ。

「つまり可奈さんは、異空間にある『魔界』に入る資格を持っているということだよ」

＊

「『魔界』かぁ…」

一通り話を聞いた所で寮の門限時間が迫っていたこともあり、可奈は自室へと帰ってきていた。

シェイドの話は衝撃的だったが、どこか納得する点があったので聞きやすかった。

しかし一番驚いたのは、まさか自分に物語のような魔力が存在したということ。

生まれ持った素質の一つだとシェイドは言っていた。

それ故に、可奈には『魔界』へ行ける資格があるのだという。

『無理にとは言わん。見たくないなら一生見なくてもいい。ただ可奈さんは物語が好きだったろう。一度見て体験してみるのも面白いかもしれないぞ？』

確かに興味はある。

翻訳家になるためにも、表現力が豊かな方がいいだろう。

どんなことにも、見て聞いて体験するのもいいかもしれない。

丁度いい事に、来週から大型連休がある。

可奈は立ち上がり、クローゼットから少し大きめな鞄を取り出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3381u/

魔界

2011年7月8日12時48分発行